

アメリカの学生

大阪大学工学部電気工学科 藤井克彦

イリノイ大学にて

昨春アメリカの大学は、第3次世界戦争の危機を肌で感じた学生が Nixon の政策に反対し騒然としていた時期があった。しかし、Nixon が大統領に再選された今、虚のように静まり返り、勉学に励んで忙しく歩き廻っている学生で溢れている。最初は Mc Goven を圧倒的に支持していた学生層の中にも、キャンペーンの期間中に Nixon 支持に変更したものが相当いるようである。彼等のいい分によると「徴兵につながるベトナム戦争には反対した。しかし、ベトナム戦争も収拾段階に入り、徴兵制も志願兵に変えると Nixon は声明した。これで犬死しなくてもすみそうだと安心すると同時に、平和到来による不況の方が心配になってきた。一方、Mc Goven はキャンペーン中にどんどん政策が後退した。これでは信用することができない。彼もやはり政治家だった。」というのが大勢をしめているように思える。

アメリカの学生運動、特に表面に現われたデモを見ている限りでは、個人のレベルで考えて自然発生的に多数が集まり、偶発的に色々な事件が起る場合が多いようである。日本の場合のように、組織され、計画されて、大衆を巻きこんで行くような要素は少ないようである。

これら一連の学生の動きを理解するためには次のような現実を知らなければならない。アメリカの大学生のうち約1/3は結婚している。そのまた半分は子供をもっている。学生の80%は何かの仕事をして、学資、生活費をかせいでいる。また、出戻り学生、の多いのも目につく。つまり、大学を出てしばらくサラリーマン生活をしたあとで、再び大学に戻ってきて勉学している。学生である。彼等は、自分に何が欠けていて、何を学びたいかをはっきり自覚して大学に通っている。以上のようにアメリカの学生は、日本の学生とは生活形態が違っている。不況でアルバイトがなくなることは重大問題である。また

卒業後の就職の問題が彼等を現実主義者になっているのもなづけるのである。

さらに、アメリカには種々の文化的、人種的背景をもった人々が生活の基盤をおいている。かつ、アメリカの大学の多くは、誰でも希望すれば入学することができる。したがって、学生の個性や素質は実に千差万別である。何十人も教室に並べて同じ教科書で、同じ進みかたで画一的に知識をつめこむ方式には無理がある。アメリカの教育制度はこれらの事情を反映して、能力主義的な点が随所に加味されている。優秀な学生は飛び越して短時間で卒業できることや大学院に重点を置いて教育の質を高めようとしている点などがこれである。大学運営も能力に応じて権限が委譲されていて、日本の大学より一見非民主的に思える所さえある。

それにひきかえ、1つの民族、1つの言葉、1つの習慣という日本は極めて単彩な社会だといえる。さらに1億総中流階級といわれるほど生活程度まで似ている。学生の能力もピンからキリまで大した差は認められない。戦後アメリカの教育方式を輸入した日本は、アメリカを1つの手本として「アメリカではこうしている。」という意見が指導的役割を果たしてきた。アメリカの大学の教科課目にならって日本でも改訂しようとした例がある。大学の運営方針を引きうつして見た大学もある。しかし、すべてがうまく行ったとは限らない。日本人は所詮日本人であって、アメリカ人ではない。学生の能力およびそのバラツキもアメリカとは異なる。本質を忘れた、短兵急な輸入は問題を紛糾させる原因となるだろう。

アメリカの学生々活を見ていると、日本人の教育、すなわちアメリカ人になく日本人の特徴を引き出す教育は日本独自で開発する以外に方法はないということを痛感する。